

# 闘 争 論 の 一 考 察

月 光 恵 雲

(4)

ジョージ・ソーレルが力について観察して社会学がそれまで注目しなかった中心観点を用いて次のように述べている。

我々は今日以前に直面しなかった事実直面している。即ち中産階級はその力を減少しているように思われる。大胆な船長族は現代産業の偉大さを作り、安静以外を望まない貴族と交代したように思われた。プロレタリアが革命思想にとらわれる時に頽廃から避けられる。対立階級が相互に間接的に影響し合う。

プロレタリアの力が強くなり、エネルギーの幾分を中産階級に返す時に全階級が救われる。

ソーレルは階級闘争の専門家であるが、その事について関心はなく、次の事に関心がある。

闘争は更新と創造力によって自己の利益を求めることによって社会体系の形骸化を防ぐのである。労働階級とその利害関係に関心を向け、その事について社会体系の共通の意味を与えたのはソーレルである。又ソーレルは階級闘争の消滅は欧洲文化の没落に至ることを信じていた。即ち社会体系は闘争を利用して、社会体系のエネルギーの更新と創造力の復活を成し遂げることをソーレルが考えた。

この事は階級闘争に限定するものでなくて、社会集団内部又は集団間の闘争は社会制度や習慣的關係が創造力を弱めることを防ぐことが出来る。価値と利害関係の衝突、存在と集団の当為との緊張関係、正当に獲得した権利と新しい階層との闘争は権利、富、身分の分配にあずかることを求め、常に生活力を創造する。中世の固定した世界と抑制し難い創造力との間の対立に例証されるように、ルネサンスはその硬直さを解消した。集団の共同作業に対立するところの障害の克服で意識や思考の展開を完成したのはジョン・デューの理論である。闘争は思考の点火者である。それが観察や注意をひきおこす。それが発見を刺戟する。それは重苦しい無関心を覚醒し、我々を目ざます。又計画を立てさせる。思想の飛躍や創造精神には闘争は必要条件である。他の立場で説明されるように闘争は経済的技術的領域の中で直接的刺戟的に作用する。

経済史家が次の事をしばしば述べている。組合の闘争の働きは賃金水準の上昇の技術的進歩の道となった。賃金上昇は資本投資による労働代用を導き、投資量の増大を刺戟した。

例えばアメリカの石炭鉱山の機械化は一部石炭鉱山の戦闘的組合運動の存在で説明された。S・Cサーフィンはその研究の中で次の事を示した。即ち産業技術の改良と資本投資の上昇は組合の圧力によると、全く類似した理解を英国のエコノミストも示した。又英国の組合の運動の緩和を非難し、英国資本主義の生産性の下降と停滞の理由をそこに見つけた。英国の組合政策と賃金上昇運動がアメリカ経済を力学的に維持したアメリカ組合政策とを比較する時にエコノミストの

判断によれば英国の組合政策は必ずしも有利なものではない。産業研究と実践の中で人間関係の方法の意義と妥当性の問題が抬頭した。この方法は工場全組織の集団目的を強調した。尚産業中の利害関係闘争を決して否定しないし、それを減少することを求めない。産業闘争の有効さの減少は未曾有の逆機能の結果となるであろう。それ故それは技術的更新の重大な刺戟を失うことになるであろう。技術進歩の効果は最も重く労働者に負荷される。公式であれ、非公式であれ、労働団体は不安緩和の試みを述べている。工場に技術革新の導入した組合労働者は結集して産業との制度的闘争の導入によって安定の感情を求め、経費節減の制度を発見し、所得増大を求める。集団間の相互の適応、理解、統一の努力は種々の生活状況の中に発見され、種々の生活の機会を持つのである。然し技術発展を阻害される危険をはらんでいる。世界の形成や改良の道具として科学の制度化した現代の西欧社会の技術的進歩と発見は複数主義、闘争を含んでいる人間関係の構造の段階的形成の傾向の中で可能である。ギルド組織の中では、他人を傷つけたり、ギルドを移ったり、他人より早く原価を安く生産することは決して認められない。技術進歩は信義に反するように思われた。理想は安定した企業の中で安定した条件であった。中世期におけると同様に新たに得た権利の担い手は与えられた習慣を維持しようと努力する。現代西欧の制度構造は闘争を自由に展開出来るところの確かな活動の余地がある。その構造は統一的でないので変化する。発見の流れに対立することは新たに与えられた権利には困難である。伝統的統一的統合の古い形は破壊すると、相互の利害関係や価値の衝突は中世構造の硬化によって統御能力を失い、新しい統合の形を要求される。軍事的、政治的、経済的制度の中で自発的経過の慎重な統制と合理的な規則が必要となる。計画的、方法論的に訓練された行為を強調する官僚組織は中世的統一構造の崩壊と同時に生ずる。然し官僚組織が広がった時にその変化に対して反対が現われる。予見の必然的信頼は革新から後退を求め、日常習慣の障害と見做される。闘争は常に不安である。官僚制は結果の予見と計算性の領域の拡大に努力し、闘争を拒否せねばならぬ。社会制度は習慣の標準に専ら注意を向けられた時に人は役立たなくなるが、それは役に立たない効力である。それだから人の因襲的教育は人を新しい条件に適応することを不可能ならしめる。尚デュイの言を引用すれば、習慣的なものは自明なものに対して維持され、潜在意識の中に働く。習慣との分裂は中心的意味である。集団と組織は求められるが、創造の能力はない。

即ち習慣は広く存在することは出来、先例と伝統の永遠の昨日につながるが、更新することは出来ない、官僚構造の内部や相互間の闘争は頑冥や儀式因襲主義の回避の可能性を作り出すが、その組織形式をおびやかす。外見上合理的の体系に対して逆機能である闘争は現実では潜在機能の成果である。更新や変化に対しての反対は官僚の職業心理であると思われるが、大学は慣習日課の中に抑圧されることなく、計画された働きの中で創造力や発見精神の表現を見つけるのに貢献した。私達が組織の変化を研究することは社会研究に大きな意味を持っている。マルクスによれば現存の社会構造の内部の関係変化に闘争は役立つばかりでなく、社会大系の変化をも促すと。

又マルクスは次の事を主張した。

変化の対立すなわち否定の要素は一定の形をとる。下部集団の闘争が激しくなり、一定の点に

到達すると、社会体系は崩壊する。此の体系の中には緊張と闘争の可能性を含んでいる。社会構造の分析で此の要素を無視する時は、又は前以て形成された関係の適応にのみ注目する時は基本的社会変化を予言することが出来ない。習慣への注目は緊張の将来の潜在要素の理解への道を閉じることになる。対立行為の理由としての体系の中に構造型、社会移動型、交替、身分の完成、権力の分配、富の分配によると同様にその範囲によって種々あります。又その中で個人の力によって権力、富、身分の分配の一定の型は種々の下部体系の内部に受け入れられる。然し一定の社会構造内部で完成の可能性を高める要求者の数は緊張と闘争を生ずる。体系の変化と体系内部の変化との相異は明らかに相対的である。過去と現在、現在と未来の社会体系の移行は常にあるであろう。社会は社会そのものの生死の時点を認めることが出来る。人は社会関係の組織の中に変化を認めることが出来る。然しかような変化は均衡の再生として一つの展望から新しい体系の形成としてもう一つの展望から観察される。自然科学者は地震の公式を発見した。それを闘争の機能の叙述に適用することが出来る。地震は振動によって地球の均衡を維持する。即ち地殻の緊張状態を解消し、地球の要素の再組織し、要素の分配の更新をする。変位が大きくなればなる程振動が大きく、変位の頻度に応じて地震の度数も多くなる。即ち内部構造の変化は起っても体系そのものが変化することは困難である。例えば人間社会では封建制や資本主義社会の理念型は十九世紀のロシアの例で見ると社会体系そのものが変化することを示していない。明らかに体系内部の変化と体系の変化との区別することは当然である。タルコット・パーソンが言ったように区別基準を見出さねばならぬ。体系の変化は本質的構造関係、全ての基礎的制度和それを支配している価値体系が徹底的に変化しなければならぬ。具体的歴史的現実において明確な相異のない体系の変化は体系内部の変化の先行の結果と言わねばならぬであろう。即ち社会体系が他の社会体系への移行の封建制度の変化は封建制度の内部の緊張によることは明らかである。一定の闘争形式が社会体系の変化又はその崩壊、新しい社会体系の形成に至るかどうかは変化に対する硬直性又は反対の体系の統制機構の弾力性によるものである。

然も体系の硬直性や体系内部に於ける闘争の強度が関連することは明らかである。硬い社会体系は闘争を抑え、急激な分裂又は力強い闘争形式の発生を求める。弾力的な体系は明らかに直接的な闘争の調停をその内部で許容し、力の均衡の移動は闘争の原因を取り除き、その中心で急激に凝固する危険がある。体系内部における緊張、闘争、妨害の区別は均衡の再生となり、闘争は新しい体系と新しい均衡の形成となることを探求することである。かような研究はヴェブレンによる既得権の論争の合目性に始まる。すべての社会体系は権力、富、成員又は下部集団の身分的位置を取り扱う。体系内部の集団や個人の分配所得と分配体系との間に完全な調和は決してない。集団や個人の分配拡大の傾向は闘争を生ずる。その要素は反対者と衝突する。社会体系内では一定の形式で名誉、富、権力の分配の既得権が保証されている。既得権の所有者は闘争を社会秩序の攻撃として、即ち自己の位置の攻撃と見做す。身分、富、権力の分配の一定の体系はこの特権を保証し、此の優先権への攻撃をその体系の攻撃と見做した。単なる既得権の喪失は既得権の位置の合法性を動揺させず、闘争を誘わない。努力は制度期待への関係に於いて相対的に不利益へ

の感情と同じく、他との比較によって喚起される。社会体系が制度化された目標と価値を所有する。その事が成員個人を規制するが、成員が此等の目標への入口を封鎖する時に制度的要求の異常を予期される。社会体系内部の集団は権力、富、威信の分配を他の集団と比較する時に此の分配を合法性を疑い、不満足となる。かような不満足を主張しない時に、革新は限定され、制度目標の後退と言われる。かような不満足主張は謀反又は価値転換を意味する。直接間接の経験の失敗は高く評価された価値を完全に廃棄する。此の体系を問題とする社会規範の違反と価値体系形成に貢献することとの旨の相異を見出さねばならぬ。

分配体系の合法性の疑いを持つ集団や個人の要素のほかにイデオロギー、技術、経済、その他の領域の要素も問題である。闘争は変化の原因であると共に結果でもある。新しい文化の特徴の導入と発見、生産と新しい分配の方法の発展は社会体系内部に種々の影響を及ぼしている。物質的目標の革新は逆に流れるが、他の思想はその位置を強化される。社会体系の均衡の妨害は個人や集団の自由意志を強化し、禁止を守らない事になる。その変化が緊張と闘争となる。換言すれば単なる不満とそこから生ずる緊張は必然的に集団闘争となる。個人は緊張状況の中で特別な安全弁として役立っている制度の助けでその緊張を消散する。他の場合異常な行為で体系に対して逆機能の結果となり、それによって変化を生ずることを取除くことになる。この事は不満を減少しない。人は不満から解放されようとするが、その基本的なもので戦わない。その反面で特殊な行為形式の形成となり、生活享受の楽しさを求める。その為に適切と思われる手段を収入の極限化のために選ぶ。その結果社会変化を生じ、不満の理由を減少する。

社会体系内部に於いて闘争条件に適応するだけの柔軟さがある時に変化が生ずる。この事についてマルクスは「哲学の貧困」の中で次のように述べている。

経済条件は労働大衆を変化した。資本の支配は此の大衆の為に共通の条件と共通の利益を持つようになった。資本に対して此の大衆は一つの階級であるが、対自的でない。闘争の中で大衆は結集し、特有の階級を形成する。それが守っている利益は階級の利益である。即自的階級と対自的階級とを区別することでマルクスは階級形成の非常に重要な側面を解明したことは注目に価する。集団への所属の感情は客観的闘争状況によって作り出される。利害闘争の場合には此の対立経験によって、その意識の強さによってその集団の同一性を作り出す。社会の均衡の変化によって新しい集団の形成又は存在する集団の強化となる。実際の闘争では既得権の所有者の反対の克服を目標とした構造関係の変化は対立の中で少い適応を期待される。国家主義的民族主義の発生についてロバート・バークが言った言葉は重要である。

闘争は社会日常行事の自然な、健全な遮断のように思われる。闘争への参加者に共通目的の激しい意識を呼びおこす。抑圧されていると感ずる人々は共通目的で動かされる。此の戦いの結果として抑圧された少数者の連帯性は強められ、闘争精神は強められる。

共同目的の此の感情は闘争のように発生し、人間行為の特質を示している。その行為は集団又は価値を形成している反応として新しい条件の挑戦に出会う。緊張は新しい闘争集団又は古い集団の強化となり、常に変化に貢献する。変化は緊張の理由を取り除かない。一定の目的のない行為

に対する緊張解消の行動である。それに反して集団の成熟した闘争は一般に新しい形成の未来の先駆者としての異常な行動と防禦体系となる。それが不満の理由の解消となる。構造内部に常に新しく突発する緊張が作られた時、緊張解消の機構の助けによる消散反応は体系を維持することが出来る。然し緊張の常に進んでいる危険を伴う分裂、非現実闘争となる不満を抑圧しない時には既得権に対して社会内部の新しい集団形成となる時に純粋な価値変化を生ずる。

(5)

次に階級闘争を取り上げるが、階級闘争と言えばマルクスを持ち出さねばならない。現代社会学の創設者、バルト、デュルケム、マックスウェーバーの三人はマルクスの取り上げた諸問題から出発したが、彼等の誰もがマルクス主義者にはならず、別な方向で発展した。これらの人々を受けつぎ、機能主義の旗手であるタルコット、パーソンズはどのように階級闘争を眺めているのであろうか。彼は次のように述べている。

1. 競争は個人主義的職業体系に付属している。威信の度合によって個人の分化が生ずる。職業選択は個人決定の事柄である。確かな程度まで可能である。これは次の事を意味する。収益者と損失者の分化が必然的に生ずる。収益者は高慢となり、損失者は失われた負惜しみ態度となる。どの程度まで正当な競争尺度の制度が完成されることが出来るか。
2. それ故に社会体系の中で組織は重要な意味があり、規律と権威が必然的に大きな役割を果たさねばならぬ。規律と権威の量の大きい事は反対者を作り出す。利益とその感覚の対立は権威を実行し、それらに屈従させられるような体系の中で組織されねばならぬ。権威を制度化する為に権威を常に必要とするところに権威の誤用を排除することは困難である。
3. 次の事は一般的傾向のように思われる。支配的位置にあるところの力の強い者は弱者と不利な使用人を搾取する。此の傾向を示した方法と、それを統制し、反対する方法は種々の社会や数限りない多様な状況の中にある。資本主義の搾取のマルクス理論は無数の可能性の中の唯一の可能性を捉えた。又その可能性は統合された結合を相互に強化する要素を示していると主張している。即ちその最も重要な要素として組織の内部の権威の位置の利用を考えている。一定の私的利益の為に国家権力の行使と考えている。然し此の要素は、分裂され、種々の要素に分解されねばならぬ。そうしてその要素は個々の独立した要素として変化し、一連の要素と関連している。然もマルクスはそれらを観察しなかった。イデオロギーと反イデオロギーに関してこれはたしかに困難な問題である。然しながら資本主義発展の法則についてマルクス教学の科学判断の基礎を得ようとする時にはそれは本質的問題である。
4. 分化された社会構造の構造的に種々の異った点で発見される個人は種々の文化を発展することは固有の傾向であると思われる。市場と収益の関係と同様に、手段の複合体の残りの要素と職業体系の構造に関連して一般に雇用体系の中にあられた分化、イデオロギーとその状況の定義が生ずる。此の分化の発展は此の集団間の連絡の障害となる。一定の状況のもとに種々の集団間の割れ目の発展傾向は累積的性格を帯びる。その時、強く統合されていない機構が反作用

する。この例として現代産業社会の企業家集団と労働者集団との反対イデオロギーである。マルクスは此の方向で分析を開始したが、十分とは言えない。

5. このような構造上の一地位と統合された下部文化の領域内で血縁と職業体系との結合の問題は特別の意味を認められる。個人の事情では職業体系の種々な点で見られる相異は収入と生活条件に関連してその相異の結果と共に家族型の明確な分化を達成すると思われる。アメリカの都市社会の中で中産階級と下層階級の集団の家族型の相対的にはっきりと分化していることが示されている。雇用決定の深層心理にまで影響する程外見上その相異は著しい。今日の社会では下層集団の家族構造は雇用を助成する。そうしてそれによって職業体系の地位の競争で此の集団の成員は明らかに害される兆候がある。血縁体系と職業体系との統合は或る事情の下では重要な要素である。それは種々の階級の累積的分裂と階級間の闘争の可能性を促進する。
6. 実際には、職業体系の理念型規範を多少示すところの職業体系の中の可能性の絶対的平等は実現されていない。規範が定めたところの制限は二種の次の主要事実の中にある。
  - a 既に述べたように、家族連帯の必要性から或る制限が生ずる。子供は両親の地位を共有する。そしてその限りでは地位分化である。そうして有利に雇われた集団は所与の可能性の種々の入口を持っている。一定の補償機構が此で反作用するように思われる。上部集団の子供はそれで除かれ、彼等は職業競争の中で決定的損失を受ける。種々の出生率は機能的意味があり、それによって下部集団の子供のために相対的に多くの指導者の地位が開いている。
  - b 包括的大社会体系の中で我々の職業界で非常に重要な役割を果たす普遍的機能的尺度の制度化の完成は不可能であるという仮説に重要な根拠がある。種々な行為を相互に比較する困難、その判断や類似した問題への完全な客観的基準の欠けていることは機構に立ち帰ることを必要とする。それは直接的比較をさけ、十分に評価されるものより寧ろ大まかな比較尺度を支持する。専門分野から事例を挙げると、一大学の大教授団の正教授の間に順位の大きな相異がある。句括的な地位類似の中に利益の相異は案外少く現われる傾向がある。その集団内部の正教授の内容の相異は世間に知られない。それは生涯の職業と同様に一定の狭い範囲の特有の競争に集中される。既ち特有の構造型に反対し、或る人間要素に影響を和らげる機能があり、それで体系の安定を護ることが職業体系の要素に含まれているとの見解が明らかになる。その特有の問題はどの程度まで根深く慢性的闘争の生産にその要素が役立つか又どの程度まで社会体系の他要素に反作用するかである。始めにこれは闘争に傾斜する構造を生ずる唯一の方向でない事が当然確認される。現代の世界では国民連帯は階級連帯に優先し、更に一般的に民族連帯が最優先している。証明するより寧ろ此の関係の中で多くの可能性の中の一可能性だけをマルクスは取り出したこと、即ちこれだけ決定的意味の可能性を与えること。この印象を拭いきれない。更に欧州では前資本主義的階級構造の残りと発展した産業社会の成果との結合の方法が階級闘争を激しくした。ここによい例はドイツである。カイゼル時代の貴族、官吏、自由業はワイマル共和国になっても権力の座を占めた。此の事は資本主義過程の独占的生産ではない。ヒットラ時代の寸前にドイツ共和主義化の危機の問題は確かにこの集団によって色どられた。確かに

アメリカ合衆国にも階級闘争はあるが、ドイツの場合と異っていて、前資本主義構造の影響は少い。マルクスの理論はこのような相異の認識を困難にした。即ち全ての階級闘争はいかなる意味に於いても資本主義社会の基本型に立ちもどされる。然ももっと重要な結論は此の種の一分析から生ずる。即ち二つの基本要素を与えられた時、資本主義又は社会主義の社会に於ける社会層や階級の機能的問題は一定の基本的同一要素を含まねばならぬ一産業社会の総括的組織と職業役割分化と家族体系である。ロシアの歴史は此の理解を述べているように思われる。経営者階級と知識人の役割は革命以来強化したが、マルクス主義ユトピアの中にその存在は認められていない。ある重要な点で管理職や技術家の役割はアメリカ社会との類似を示す。然し資本主義社会と非資本主義社会の間に基本的社会学的相異は顕著である。現代の産業社会の中の階級闘争は一種の流行病である。その闘争が現代社会の有力な特性であり、その動的発展を形成することを明確かに示されることは出来ないであろう。我々の科学が今日より発展した時に階級闘争と緊張の、闘争と変動の他要素との関係はマルクスによって確かに始められたような一般的な説に関連して一複合事実である。マルクスが書いた時代以来、社会構造の知識は非常に拡がり、深くなったことは此の問題関係に適切である。此の知識の展望は現代西欧社会の社会学的解釈の強調した。資本主義的と社会主義的産業主義が一般的に基本変数として、又辨証法的発展過程の著しく個別に分れた段階としてでなく観察された。行動の束縛より寧ろ実際にマルクス思想の固い発展図は制度生活の無限の種々の事実の解明への根源として現代社会学者に考えられた。人は革命への進軍ラッパの代りに社会科学の発展に於ける一段階として階級闘争のマルクス理論を見る時に百年前に経済思想を支配していた功利主義理論を超えて明らかな進歩を示している。けれどもそれらが新ヘーゲル派の史観の概念で理解されて居り、後の社会科学の立場から見られた時に経験的見解とそこから導き出された一般論に社会過程に於ける動的要素の分析論より更に進歩を示した。生産関係と生産条件の意味と内容の解釈論はそれらに対する標識である。それらが社会制度の理論に於ける基本認識の公式化の出発点となる限りマルクスの概念は確かに現代社会学の後期発展に大きな役割を果たした。階級構造のマルクス理解は全般的に正当なものとして認められるが、此の現代社会学概念で階級の意味発生の問題に関係する時に明らかにマルクスの理解の修正が必要となる。一定の点で成層体系は社会体系の安定の為の実証的機能を有する。資本主義的収益追求の体系の内部で動機づけの制度化が生ずる。階級なき社会のマルクスの理念は家族体系が存在する限り他の基礎から特にユトピア的と思われる。資本主義と社会主義の社会の相異は就中社会層に関連するものであり、マルクスやエンゲルスが認めた程大きくない。両方の社会型の中に多くの階級闘争の根源がある。それは生産過程の構造の中心点を持っている。マルクスによって観察された闘争源は彼が認めたように資本主義の搾取の過程に余り移動出来ない程固く統合されている。それらは非常に特殊なものとして独立した変数として示されている。家族連帯はマルクスの中心点である生産関係の外側に横わっている。それらは一例でしかないが、闘争の根源のマルクス理論は多くの未知のものを残していることを忘れてはならない。

## (6)

社会闘争問題に機能主義の社会像の応用はその初期には満足なものとは言えない。その極端な代表者の一人はアメリカ産業社会学者エルトン・メヨーであった。彼は社会学者や経済学者の中で特色あるものとして今日尚その学説は有効部分がある。メヨーにとって社会の正常な状態は統合、組織、協力、体系の均衡のある機能発揮するものである。各個人、各集団、各制度は全体の体系の中でその課題とその地位を持っている。それらは機能を持っている。然し社会の中で摩擦が起きないという保証は何処にもない。産業社会では集団形成に集団が他集団と協力する努力しないことが特色の一である。その態度は習慣的に無関心と敵対行為である。集団の敵対関係は社会の分裂を生じ、社会の衰亡を導くのである。メヨーは社会構造の分裂面を説明しようと試みた。集団闘争は社会構造そのものから発生することは出来ない程社会は完全な機能組織であり、闘争のあるところに反社会行為や個人の病的理由がある。社会闘争は社会関係の心理的障害の反映以外の何ものでもない。産業闘争は主として組合指導者の個人的特色による点が多い。此の人達は友好的でなく、相互に話し合う事もなく、敵対の相手としてのみ人を眺める。彼等の生涯は社会追放の歴史である。社会闘争の克服の問題は基本的に闘争集団の精神療法の問題である。メヨーの言うように社会習熟の媒体の問題である、全ての個人が他人との平和な協力の習熟を完成した時社会機能は十分に機能を発揮することが出来る。メヨーの考えを手引として規範概念の中で標準的なものがどのような変化するかを観察せねばならぬ。代表統治は社会によっては有効に行われることが出来ない。その社会は集団の敵対関係や憎しみによって分裂される。社会の中の集団の敵対関係を吸収し、それを統治に利用することを代表統治の意味でないのではないか。メヨーにとって社会均衡した機能の働きの全ての部分の協力の正常な状態が全体の名誉又は理想状態となる。障害として働いているところのもの全て価値のないところのものと同じく道徳的、政治的に拒否される。社会学的解釈の原則は政治のドグマとなる。社会は協力体系である。文明社会は協力が理解と協働の意志にもとづき、力にもとづかないものである。社会の価値ある上部構成を見逃がす時、メヨーの論理は強引である。社会は有機体の機能組織に類似している限り、社会の要素の各々が全体の維持に貢献する。社会はその均衡の構造障害を生じない。障害があらわれた時に反社会的理由を持たねばならぬ。それ故に重要な心理的理由が問題となる。闘争は協力体系の社会の障害の社会学的任意の現象である。これはユトピアの論理である。それは異常の全体処理の論理である。それは政治的分裂の心理的解釈の全科学的追求の論理、権威的症候群とファシスト行為、又は精神異常の人、社会主義的志向との関連の主張を含んでいる。此の論の結果は明白に極端な機能主義の無効を示す。闘争が機能のない時には一般に社会学的現象ではない。それ故に社会学は問題としてのみ闘争を理解する可能性を持っている。社会学が闘争の研究に従事する時、社会学は犯罪、心理病理学、労働闘争の政府対立等を区別しない。これらは同じ個々の障害の全体的症候群の変体となる。人はこの手掛りの政治的裏面をその運命に委ねる。それ故に社会学的公式化出来る基本から次の事が明らかにされない。すなわち社会闘争の心理的克服は



規則正しく反対になり、闘争の尖鋭化に貢献する。各方面で此の極端な機能主義で分析の形式を用いることの出来ない方法である。

それに対してメヨー、アドルノ、エセンチは解釈でなくて全ての場合に問題の公式を提供する。社会学的問題は社会闘争の組織的構造的な理由の問題である。即ち人間の社会や歴史の中で闘争の位置はどのようなものであるか、メヨーはこれらの問題に答えることを避けて価値判断や精神病理的に答えている。

此のメヨーに対立するものとしてK・マートンは「社会構造とアノミー」の論文の中で社会像の型性格で答えている。機能を発揮する社会体系は社会学分析の手段以外のなにものでもない。機能主義にとって社会の機能性に向って努力する限りでは機能統一と普遍的機能主義の極端な要請を制限する。これらを決して示さない社会体系は機能を発揮することが出来るか、又は社会体系は機能を発揮することが出来ない。両方の状態が社会分析の対象である。とりわけ第二の限定がメヨーに対立して社会構造の体系的生産物として闘争をマートンが認めることが出来た。社会構造に役割、関連集団、制度から生ずる状態がある。かような闘争の意味や位置がどのようなものであるか、此の点でマートンは非常に多く用いた逆機能の概念を導入した。闘争は逆機能である。闘争は社会の無機能に役立った。闘争は社会を破壊し、分裂する力である。逆機能は観察結果である。それは社会体系の適応を減少する。逆機能の概念は構造面で緊張と負荷を含み、動態と変動の研究への分析の手掛りを提供する。マートンの研究は機能的分析の発展に大へんな貢献をしたことは疑う余地はない。此の進歩は闘争の組織的解釈の可能性に関連している。然し逆機能の概念は構造的機能的分析から変動の分析への橋わたしになるかどうかは疑わしい。逆機能は純粋な剰余範疇でないことは正しい闘争は社会体系の機能作用に役立たないと言わなくて闘争は体系の無機能作用に役立つと言う。逆機能の概念は闘争は何かを言っている。社会の無機能作用は何か、それは社会の病氣、規範の逸脱であるのか。その方法で全くある他の法則が支配する規範状態であるのか、此の問題は答えられていない。逆機能の概念の中で説明の断念又は剰余範疇を見つける努力をする。逆機能はレッテルでしかない。人はそれを現象に貼るのである。その解釈することは出来る。ストライキや革命は逆機能である。その関連する社会体系の無機能作用に役立っている。マートンの闘争と機能主義を統合することは困難であることは明らかである。社会構造の個別適応の方法の類型学に於いて文化目標と制度手段で次の五適応方式にマートンは区分する。

最初の四方式は即目的に整然として機能分析の手段であって次の如くである。

受容された文化規範の意味で有効な制度的手段の拒否としての革新又は強い意味での反抗主義としての拒否、有効な価値の時代の承認なく社会的に規定された手段と単なる外部的一致説としての儀式主義、社会の真の他所の人による制度的手段と同じく有効な価値の何か誤っている後退の態としての拒否、それらに対してマートンは次の事を認める。

精神病、自閉症患者、浮浪者、追放者、無宿者、アルコール中毒患者、麻薬中毒患者から成り立っているところの集団を基本的に政治革命者に付加せねばならぬ。その限りでは現存の社会体系にその目標や手段で反対する。然しマートンは後者から前者を区別する。マートンは第五の範

嚙に叛乱を示す。他のものから叛乱と後退とを区別するとマートンは言っている。唯一の相異は叛乱の社会的積極的性格にある。又は存続するものに対して反抗するものの性格の中では少い。マートンは明白に社会対立の分析を処理する努力と機能的な手掛りのある印象深い手段とを維持しつつつづけようとした。此の手段は処理しにくいが純粋な理論的解釈ではマートンは変っていた。叛乱の範疇の中でメヨールの素朴さをマートンは認めた。社会闘争の説明に機能価値と手段体系からの出発は不可能である。

#### 参 考 文 献

- Dreitzel ; Sozial Wandel, Berlin, 1967  
Ralf Dahrendorf ; Pfade aus Utopia, münchen, 1967  
Robert K. Merton ; Social Theory and Social Structure, London, 1964,  
Ralf Dahrendorf ; Class and Class Conflict Stanford, 1965,  
Anthony D. Smith ; The Concept of Social Change, London, 1973,  
Coser ; The Function of Social Conflict, Chicago, 1965,  
Talcott Parsons ; Soziologische Theorie, Berlin, 1968,